慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会経済史大系
Sub Title	
Author	寺尾, 誠
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.5 (1960. 5) ,p.495(79)- 496(80)
JaLC DOI	10.14991/001.19600501-0080
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600501-0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

増淵龍夫著『中国古代の社会と国家』

—秦漢帝国成立過程の社会史的研究—

一九二〇年代末以来中国革命の当面する中国社会の歴史的性格の規定をめぐって、アジア的生産様式を東洋社会独自の社会構成によるとする見解と、それを奴隷制・封建制という継起的社会発展の普遍的な発展段階に関連づけて解釈しようとする見解とが対立したことは周知の如くである。マジアール——ウィットフォーゲルの系譜において発展した「東洋的社会の理論」・大規模な治水灌漑工事を国家が必要とする自然的、地理的条件が「西洋的」封建制的階級秩序形成を排除してアジア的ディスポティズムを維持し、その体制を変革する力は体制内部からは生れてこない・という考え方に対して、社会発展の方法的規準によりながら「実証研究の面に深い開拓の鍬を打ちこみ、そこから方法自体への検討の道を開く」にはきびしい研鑽の道程が必要であった。

本書は秦漢時代を基本的には奴隷制と規定し、劉邦集団の分析を媒介として形成過程にある漢の国家権力の中核構造との同質性において漢代家族をとらえようとした西嶋定生氏のあとをうけて、先秦時代の氏族制的邑共同体の分解によって放出されてくる個々の家々や個々人を再び結びつける新しい人的結合関係、そこに形成されてくる新しい社会秩序を、同じくその共同体の崩壊過程から生れてくる新しい国家権力、専制主義的な秦漢帝国の形成の具体的過程とそのもとにおける社会秩序の固有な構造を「統一的視野のもとに」明らかにしようとするきわめて意欲的な力作である。その底には、「所謂名田所有者や劉邦を中心として集る集団の組織分子を家内奴隷制という普遍的概念で一義的に規定しようとする方法的規準」への疑問もある。

その内容は、序論、中国古代社会史研究の問題状況。第一篇は戦国秦漢社会の構造とその性格で先秦時代の氏族制的秩序の崩壊過程から生ずる新しい人的結合の習俗関係にもとづいて形成される社会秩序の特異な構造を豪族を中心に分析し、その心情的な人的結合が支配関係を如何に内面からささえ強化したかを、法的規範との関連からみる。第二篇官僚制の成立とその社会的性格では今みた民間秩序と並列して形成される中央集権的官僚制を同質一体として、専制君主制の政治秩序として考察し、以上を背景として第三篇古代専制主義の成立とその経済的基盤で専制君主権力の基礎を考究し、その固有な性格・民田所有者に対する支配強化を必要とした・を郡県制成立過程の動態的分析のなかから析出しようとするものである。（弘文堂・A5・四五四頁・一二〇〇円）

—平野絢子—

＊　＊　＊

安永武巳著『消費経済学、日本の消費構造と需要予測』

戦後日本経済は回復過程から新しい成長過程へとすばらしい発展を示した。この間我々の消費生活も著しい改善を見せ、新製品も続々と登場している。経済の消費面は我々の日常生活に最も近いため、だれでも一応の事は知っており、エンゲル係数等の名称も親しみぶかいものがあろう。しかし一歩進んで戦後の消費回復過程はどのような道をたどったか、消費水準はどのように測定されるべきか、経済成長、景気変動と消費の関係、消費の輸入依存度、消費函数、需要予測の測定となると常識だけでは答えられなくなる。そこには正確で豊富な資料と計量経済学的方法が必要となってこよう。本書はこれらの問題に答えるため執筆され、第一部で国民生活の変貌を、第二部で国民経済と国民生活の関連を、第三部として需要予測の理論と実際という表題の下に以上の理論と実際が展開される。安永氏の立場は序文でも示されているが、各種の展開と予測の後に、最終の章、将来の国民生活の構図の中で、「以上により七・二％というような経済成長を実現するためのカギは、貯蓄よりもむしろ消費の育成にあるといえる。かくて消費はもはやそれが三次部門の享楽的消費であったとしても、それが正常な余暇 leisure の消化であり、人を堕落の淵に陥れるものでないかぎり経済の発展のためにはむしろ必要であり、その意味で従来罪悪視された『消費』はもはや美徳と化し、反対に刻苦勉励、勤倹貯蓄を至上とする尊徳精神は、すでに過去の経済モラルに属し、そうした考え方はいまや経済を阻害する危険な思想となりつつあるといえよう。同様に三次部門は価値を生まないというマルクス流の考え方もこのような経済のもとではもはや妥当しないということができよう。」と明瞭にしめされている。更に五年後には都市のエンゲル係数は五ポイント低下し、内地米は増えるが、外米はへり、畜産品や新鮮な食料は増加し、耐久消費財、合成繊維もふえるが、最も大きな変化はサービス業の革命的変容であり、娯楽の増加も単なる量の増加ではなく、質的にも変化し、古人が「之を楽しむ」という所にも達しようという。これに対して、いわゆる貯蓄・資本蓄積論者からあまりに楽観的であるとの批判もでようが、消費の鬼安永氏の情熱と日本経済のはかりしれない成長への期待が感ぜられるのである。（至誠堂・A5・四一七頁・五〇〇円）

—佐藤　保—

＊　＊　＊

『社会経済史大系』

「いまや新しい世界思潮を反映して、わが歴史学界においても、従来のヨーロッパ中心史観の克服が叫ばれ、世界史の見直しが要請されている。しかし、焦燥にはしらず、独善におちいらずにこの大きな課題にたち向うためには一方において歴史研究に従事するものの絶対な協力体制をうちたてることが必要であると同時に、他方において、まずなによりも、十八、九世紀以来の社会科学の基礎的諸概念を生みいだした、ユニークな歴史的個体たる西ヨーロッパの社会経済の発展を、もう一度新しい視角から、最近の斯学の研究水準に照らして、意欲的・実証的に検討することが必要である。」

以上を引用した発刊の辞にあるような世界史的観点で全十巻にわたり刊行されつつあるのが本講座である。現在までに刊行されたのは中世前期、中世後期、近世前期Ⅰ、近世前期Ⅱの四冊である。この他古典古代、近世後期Ⅰ、近世後期Ⅱ、現代、社会経済史家評伝、日本における社会経済史学の発展といった各巻が予定されている。新しい世界史の観点がこの書物の中でどのように具体的実証の労作を通じ貫かれ、書き表わされるかについては講座全体を読んだ上でなくては結論的にいうことはできない。しかし現在まで出た巻につ

いていえば、発刊の辞のいう通り現在までの世界史の発展の中で果してきたヨーロッパ諸民族の歴史のもつ先進的な役割が、何故可能であったのか？という根本的な問いを具体的な個別研究において深めているといえよう。とくに中世前期、後期にのせられた諸労作はヨーロッパ資本主義をその胎内からうみだすにいたったヨーロッパ封建制について新しい研究史の成果に立ったもので注目される。そこではかつてヨーロッパ封建制についてとなえられていた古典荘園制についての再吟味が様々の角度から行なわれている。とくに領主と農民という封建的生産関係が具体的に農民の共同体的な定住においてどのようになっているか？　といった問題が解明されている。

近世前期においては市民革命の時期の様々の問題が新しい研究の成果の上で解明されている。とくにイギリス市民革命をめぐる諸問題の解明に多くの頁がさかれ、内容的にも注目される。ヨーロッパ資本主義の中でも先進的な発展をとげたイギリス資本主義の道が市民革命を契機にきりひらかれていったことを思えば、当然のことであろう。

最後に簡単に批評をいえば諸労作の間の問題意識が必ずしも共通のものでない場合もあり、この点発刊の辞のいうような協力的研究体制が今後の歴史研究にとり不可欠のものであることが痛感される。又政治史や社会史その他との関連も社会経済史という以上もっと要求されてくるであろう。（弘文堂・全十巻・A5・各巻三五〇円）

—寺尾　誠—

*　　*　　*

気賀健三著

『ソビエト経済の研究』

ソ連経済はきわめて高い経済成長率を誇ってきた。しかし、ソ連の計画経済のメカニズムは、中央指導的計画経済固有の矛盾をもっている。本書は、この矛盾に光を当てるとともに、これに関連して、マルクス——→スターリン主義理論の根本的誤謬を鋭く指摘する。

先ずマルクスとスターリンと題された第一章においては、上部構造と下部構造との関係についての両者の見解の相違が指摘される。そして、スターリンが自ら上部構造の指導者の地位に立ったことが、上部構造の歴史的役割を力説したり、歴史における恒常的要因を重視するようになった一つの理由であると論じられる。第二章はスターリンの経済法則論の批判にあてられている。ここで、スターリンのいう「国民経済の計画的社会主義経済の基本的経済法則」が、客観的法則でなくソビエト権力の「公称目的、計画意図」の表明にすぎないこと、「国民経済の計画的（釣合のとれた）発展の法則」が現実にあらわれていないことが指摘されるが、以下の章は、この点を実証する役割をも果している。そこで特に強調されていることは、市場価格機構を基礎としない計画経済においては浪費、不均衡、低能率を避けがたいという点である。事実、ソ連経済の最近の動きをみると、価値法則の利用が強調され、商品生産の意義が再認され、計画機構の分権化が進んでいる。こうした方向への現実の動きは、マルクスの本来の理論においては説明し難いものであり、また、いくつかの点では、スターリンの命題をも超えて進んでいるといえる。結局、こうして、ソ連の計画経済は、その経済的合理性への要請が強まるとともに、市場経済的機構を基礎とする経済計画の方向にますます進まざるを得ないのではないか、というのが筆者の考えのように察せられる。

本書は論文集の形をとっているが、全体は以上のような主張によって貫ぬかれ、統一されている。即ち、前半においては、思想的理論的問題の解明に重点がおかれ、後半においては、主として実証的分析によって、前半の主張を裏付けるような議論がなされ、こうして、問題点を浮彫りにしている。

本書は、ソ連経済の讃美論とか単なる解説書とは全く異なり、ソ連経済の華やかな発展の蔭にある矛盾乃至問題点をえぐり出した注目すべき研究であるといえよう。（日本評論新社・A5・一八五頁・二八〇円）

—丸尾直美—

*　　*　　*

エウジェニオ・ガレン著

清水　純一　訳

『イタリアのヒューマニズム』

—ルネサンスにおける哲学と市民生活—

本書はイタリアの哲学史家ガレン教授のルネサンス思想史である。ルネサンスには独自な思想家が少ないため思想史的には従来見過されがちであった。しかし中世と近代の結び目としてその性格が明らかにされねばならぬ。本書はその要求に答えるものと言えよう。

著者の意図は、大小さまざまのヒューマニストの文献を駆使して、当時の市民生活において論じられた主題を、なるべくそのままに再現するにあった。必ずしも新しいルネサンス解釈を示そうとするものではない。豊富に用いられた資料自身によって語られるルネサンス思想史を、そこにみるのである。

ヒューマニズムが古典の再生をはかる文化運動であるのは言うまでもないが、それは古典を通じて古代の人々と会話をし、人間教育の助けにしようとするものであった。会話によって隣人と語りあう市民生活の意義を、ヒューマニスト達は高く評価した。孤立した冥想生活には何の意義も認めなかった。活動的な市民生活の範としては古典との会話を重んじた訳であるが、その古典は歴史の中に生きた古代人を具体的に示すものとしてとらえられた。新しい言語文献学は、古典を生きた言葉として史的背景の中に理解しようとする必要から生まれた。初期ヒューマニズムはこのように市民生活の自由を強調するものであったが、やがてフィレンツェの独裁者によってそれは脅かされるにいたる。フィレンツェに栄えるプラトニズムはその事情を反映して市民活動を逃避した冥想的性格を濃厚にしていき、その中で人間の尊厳性を極めようと試みる。他方パドヴァを中心にする伝統的なアリストテレス研究にも、変化が生じてくる。プラトニズムに誘発されて、アリストテリズムでは霊魂論、知性論が主題となるが、ここから論理学や方法論への道と自然探求への関心が開けてゆくことになる。このようにしてイタリアのヒューマニズムは、市民生活を重んじる人間の社会性と尊厳を強調し、一方で経験的合理性を基礎に自然科学へ接近してゆくことにより、近代思想の成立を促すことになる。ガレンの結論を直線的にひきだすのは危険を伴うが、以上はその一面をとりだしてみた。（創文社・A5・三四〇頁・七〇〇円）

—渡辺和一郎—

*　　*　　*